

●現代への疑問と不満を抱き、矛盾の解決をめざす人びとへ——ここHOWSで、真実の思考を追究しよう！

2014年度後期 開講講座

11月8日(土) 13時45分開場／14時開会  
東京・文京区民センター

ロシア十月社会主義革命97周年記念 映画と講演の集い

社会主義か野蛮か、資本主義との訣別を！それが合言葉だ

報告＝山下勇男（社会主義理論研究）

映画『カメラを持った男』（邦題『これがロシアだ』67分 監督＝ジガ・ヴェルトフ）上映

特別企画 10月17日(金) 18時開場／18時半開会  
東京・日比谷公会堂

10・17戦争への道をゆるさない東京集會に参加  
講演＝集団的自衛権行使容認閣議決定撤廃と沖縄  
講師＝前泊博盛（沖縄国際大学教授／元琉球新報論説委員長）

このページの赤字部分に変更した個所です。  
ご注意ください。

1、安倍ブルジョワ独裁政権との対決

多国籍独占資本の政治的代理人である安倍壊憲政権は、軍事大国化路線をはじめ、政治・経済・社会のすべての分野で、日本国家が国際的に生き残るため、平和憲法を否定し、戦争ができる「普通の国家」としての日本国への「全面改造」を目指している。その現実とこれを許さない闘いの方向を探る。

- ①11月15日(土) 壊憲・改憲反対闘争の再構築を！  
報告Ⅰ 「10・17集會」後の闘いの進め方をめぐって  
講師＝二瓶久勝（壊憲NO！96条改憲反対連絡会議共同代表）  
報告Ⅱ 無効なり！「7・1閣議決定」  
講師＝新田 進（国際労働運動研究）
- ②11月26日(水) 日米防衛協力のための指針（ガイドライン）再改定の問題点  
—— 集団的自衛権行使容認と春の法整備を見据えて  
講師＝高橋俊次（壊憲NO！96条改憲反対連絡会議事務局）
- ③12月3日(水) 政府・マスコミ一体となった「朝日」攻撃の本質  
—— 「ならず者の最後の拠りどころ」愛国心  
講師＝山口正紀（ジャーナリスト、人権と報道・連絡会世話人）
- ④1月17日(土) 現代資本主義と国家  
—— 安倍政権が夢想する国家像とはなにか  
講師＝鎌倉孝夫（埼玉大学名誉教授）

2、規制緩和・合理化が進む労働現場はいま

際限のない利益を追求する独占資本の全世界展開と熾烈な国際競争は、日本国内の労働者にも、これまでにない過酷な労働を強いている。それは民間の製造現場や公的労働の区別なく襲いかかっている。これと真正面から対決するためには、資本家階級のめざす労働者支配の構造を掴みとることが不可欠だ。

フィールドワーク（定員20名 要予約）

- ①11月28日(金) いま、製造業の現場はどうなっているのか  
—— オリジン電気・間々田工場、結城オリジン自動化ライン見学
- ②2月17日(火) 息つく間もない労働強化の進行  
—— JRで働く国労組合員の話
- ③3月11日(水) 多国籍企業の下僕と化した安倍政権  
—— 「日本再興戦略」を読む  
講師＝吉良 寛（横浜市従業員労働組合）

3、激動する国際情勢

—— もう一つの見方

日々われわれは、ブルジョワ・マスコミが伝える「国際報道」に囲まれて生活している。しかしそれは、われわれ労働者が必要とする認識とはかけはなれている。資本主義から社会主義への変革をめざす運動には、ブルジョワ虚偽意識との不断の対決が必要だ。

- ①12月13日(土) 映画『稟愛』を観て中国の現状を考える  
—— 中国「社会主義市場経済」下の三農（農業・農村・農民）問題  
講師＝山下勇男（社会主義理論研究）
- ②1月24日(土) 「9・30事件」から50年が過ぎて  
—— インドネシア共産党への大弾圧事件を検証する  
講師＝倉沢愛子（慶応義塾大学名誉教授）
- ③1月28日(水) マスコミが伝ええないウクライナ問題  
—— 「ロシア主犯」説を疑う  
講師＝富山栄子（国際交流平和フォーラム）

4、働く権利と平和を求める女性労働者

安倍首相は、第二次改造内閣で5人の女性を大臣に指名、「女子力開花内閣」と名付け、新たに「女性活躍省」を新設した。しかし、安倍の言う「女性が輝く社会」とは、ごくわずかの女性が「輝く」社会であり、他の多くの女性たちは、無権利・低賃金で酷使される社会である。

- ①1月14日(水) 政府独占の女性政策を撃つ  
—— 安倍政権の「成長戦略」と「女性の活用」  
講師＝鴨 桃代（全国コミュニティユニオン・前代表）
- ②2月21日(土) いまは福島のこと、いつかはあなたの町のこと  
—— ふるさと福島を奪われ、若い母親となって  
講師＝若松こはる（介護士）
- ③3月7日(土) 3・8国際婦人デー東京集会

5、日本の短編小説を読む

講師＝立野正裕（明治大学教授）

日本近代文学を特徴づける自然主義文学、心境小説、私小説、プロレタリア文学それぞれの典型的な作品を一編ずつ取り上げ、異同とともに表現の推移を、各作家の比較をつうじて論じ合いたい。

- ①11月18日(火) 正宗白鳥作『本能寺の信長』  
（新潮社 日本文学全集第12巻1963年）
- ②12月16日(火) 尾崎士郎作『河鹿』  
（新潮社 日本文学全集第32巻1967年）
- ③1月20日(火) 佐多稲子作『キャラメル工場から』  
（新潮社 日本文学全集第26巻1967年）
- ④3月24日(火) 葛西善蔵作『湖畔手記』（岩波文庫）

6、反ファシズム戦争勝利70周年にあたって

—— 映画を観て討論する

2015年は第2次世界大戦が終結し、反ファシズム戦争が勝利して70周年に当たる。全面的ではないにせよ、隠されていたこの戦争の実態を、世界の人民に知らせたのは、ニュルンベルクと東京に設置された国際軍事法廷による戦犯裁判であった。戦争犯罪を裁くことによって、また戦争を遠景として問われる戦争責任追及の課題を検証する。

- ①1月10日(土) ソ連作品『ニュルンベルク裁判——人民の裁き』  
（1946年 ロマン・カルメン監督・62分）上映と講演・討論  
講演＝ニュルンベルクと東京のあいだ  
—— 反戦・反ファシズムと〈植民地犯罪〉の交錯  
講師＝前田 朗（東京造形大学教授・刑法）
- ②4月18日(土) フランス・スウェーデン作品『戦争は終わった』  
（1965年 アラン・レネ監督・116分）上映と討論  
解説＝立野正裕（明治大学教授）
- ③3月28日(土) フランス・イタリア作品『かくも長き不在』  
（1960年 アンリ・コルビ監督・98分）上映と討論  
解説＝岡野奈保美（文化活動家）

◎HOWS付属ゼミナール

HOWS本科生と聴講生は、有志参加による下記ゼミナールに参加できます。参加費は各ゼミ毎に別途お支払いください。

- ①戦後文学ゼミ  
チューター＝山口直孝、松岡慶一  
2000年より武井昭夫、湯地朝雄をチューターとしてはいま戦後文学ゼミは、戦後文学を運動論の視点から捉えて検討し、文学運動の今日における再生を探ろうとする研究会です。これまで、宮本百合子、中野重治、佐多稲子、花田清輝、大西巨人、武井昭夫の仕事を取り上げたほか、戦後の文学運動の歩みを確認してきました。  
2014年度は武井昭夫の批評運動をとりあげます。  
●2014年11月16日(日)  
〈われらの批評〉はこれでいいのか！—— 武井昭夫、1966年の闘争報告者＝山口直孝  
●2015年1月18日(日)  
〈戦後〉記録文学は“強烈な笑の文学”たりえたか？  
—— 武井昭夫と杉浦明平  
報告者＝飯島 聡  
●2月15日(日)  
“強烈な娯楽性”とは何か—— 武井昭夫の批評精神  
報告者＝田中芳秀  
●3月15日(日)  
「パリ・コンミュンの教訓」を読む  
—— 批評の創造性は時代精神の覚醒をうながす  
報告者＝井野茂雄

- ②群読ゼミ  
世話役＝小松厚子  
台本づくりから朗読まで、参加者全員による共同制作を行ないます。この作業を通じて参加者がそれぞれに歴史について、また時代状況について学習をすすめる運動です。  
●これまでの制作・作品には、次のものがあります。  
1) いま、私たちの労働現場から—— グローバル化と闘う世界の女性労働者との連帯  
2) 私たちの戦争案内—— 急速に進行する戦争体制づくりに抗して  
3) 戦争を止めよう！—— あなたも・日常から・世界の女性と共に  
4) 戦争を止めよう！Ⅱ  
5) いま、私たちの労働現場からⅡ  
6) 私たちはどういう社会をつくりたいのか—— 憲法改悪は誰のため？  
7) 憲法改憲反対！ 忘れな 戦争責任と不戦の誓い  
8) 共闘こそ力！—— 壊憲を許すな  
9) 先に起つのは君だ—— 戦争・失業・貧困をなくそう  
10) 憲法と原発—— 目を覚ませ！ 未来の世代のために  
11) 不安だらけの未来はいらない  
12) 利益優先の社会はいらない—— 闘おう！ 未来のために  
13) さし迫る壊憲の危機—— 知らなかったではすまされません  
14) すでに始まっている戦争への道—— 私たちの戦争案内Ⅱ

7、この人に聞く

- ①11月12日(水) 県内移設、新基地建設を拒否する沖縄県民—— 沖縄の民意を踏みにじる政府への県民の怒りの高まり  
講師＝木村辰彦（沖縄・一坪反戦地主会 関東ブロック事務局長）
- ②11月22日(土) 在日一世が語る日本と朝鮮—— 戦争と植民地、そして安倍政権登場の時代を生きて  
講師＝白 宗 元（歴史学博士）
- ③12月6日(土) 今日の反中嫌韓の起点を検証する—— 尖閣諸島問題・日中領土問題の起源  
講師＝村田忠禧（横浜国立大学名誉教授）
- ④2月28日(土) 時代閉塞のなかで生き、考える若者たち（第二弾）—— 『社会評論』177号・178号の若者特集記事を読んで  
講師＝中西新太郎（元横浜国立大学教員）
- ⑤3月14日(土) 拉致問題で歪む日本の民主主義—— 日朝交渉再開と日本政府・マスコミの対応を検証する  
講師＝高嶋伸欣（琉球大学名誉教授）

HOWS講座カレンダー 2014年度後期（11月～3月）

11月8日(土)	開講講座 ロシア十月社会主義革命97周年記念映画と講演の集い 社会主義か野蛮か、資本主義との訣別を！それが合言葉だ 『カメラを持った男』（邦題『これがロシアだ』67分 監督＝ジガ・ヴェルトフ）上映 報告＝山下勇男（社会主義理論研究）
11月12日(水)	県内移設、新基地建設を拒否する沖縄県民—— 沖縄の民意を踏みにじる政府への県民の怒りの高まり 講師＝木村辰彦（沖縄・一坪反戦地主会 関東ブロック事務局長）
11月15日(土)	壊憲・改憲反対闘争の再構築を！ 報告Ⅰ 「10・17集會」後の闘いの進め方をめぐって 講師＝二瓶久勝（壊憲NO！96条改憲反対連絡会議共同代表） 報告Ⅱ 無効なり！「7・1閣議決定」 講師＝新田 進（国際労働運動研究）
11月18日(火)	日本の短編小説を読む 正宗白鳥作『本能寺の信長』（新潮社日本文学全集第12巻1963年） 講師＝立野正裕（明治大学教授）
11月22日(土)	在日一世が語る日本と朝鮮—— 戦争と植民地、そして安倍政権登場の時代を生きて 講師＝白 宗 元（歴史学博士）
11月26日(水)	日米防衛協力のための指針（ガイドライン）再改定の問題点—— 集団的自衛権行使容認と春の法整備を見据えて 講師＝高橋俊次（壊憲NO！96条改憲反対連絡会議事務局）
11月28日(金)	いま、製造業の現場はどうなっているのか—— オリジン電気・間々田工場、結城オリジン自動化ライン見学（定員20名） 講師＝山口正紀（ジャーナリスト・人権と報道連絡会世話人）
12月3日(水)	政府・マスコミ一体となった「朝日」攻撃の本質—— 「ならず者の最後の拠りどころ」愛国心 講師＝山口正紀（ジャーナリスト・人権と報道連絡会世話人）
12月6日(土)	今日の反中嫌韓の起点を検証する—— 尖閣諸島問題・日中領土問題の起源 講師＝村田忠禧（横浜国立大学教授）
12月13日(土)	映画『稟愛』を観て中国の現状を考える—— 中国「社会主義市場経済」下の三農（農業・農村・農民）問題 講師＝山下勇男（社会主義理論研究）
12月16日(火)	日本の短編小説を読む 尾崎士郎作『河鹿』（新潮社日本文学全集第32巻1967年） 講師＝立野正裕（明治大学教授）
1月10日(土)	ソ連作品『ニュルンベルク裁判——人民の裁き』（1946年 ロマン・カルメン監督・62分）上映と講演・討論 講演＝ニュルンベルクと東京のあいだ—— 反戦・反ファシズムと〈植民地犯罪〉の交錯 講師＝前田 朗（東京造形大学教授・刑法）
1月14日(水)	政府独占の女性政策を撃つ—— 安倍政権の「成長戦略」と「女性の活用」 講師＝鴨 桃代（全国コミュニティユニオン・前代表）
1月17日(土)	現代資本主義と国家—— 安倍政権が夢想する国家像とはなにか 講師＝鎌倉孝夫（埼玉大学名誉教授）
1月20日(火)	日本の短編小説を読む 佐多稲子作『キャラメル工場から』（新潮社日本文学全集第26巻1967年） 講師＝立野正裕（明治大学教授）
1月24日(土)	「9・30事件」から50年が過ぎて—— インドネシア共産党への大弾圧事件を検証する 講師＝倉沢愛子（慶応義塾大学名誉教授）
1月28日(水)	マスコミが伝ええないウクライナ問題—— 「ロシア主犯」説を疑う 講師＝富山栄子（国際交流平和フォーラム）
2月17日(火)	息つく間もない労働強化の進行—— JRで働く国労組合員の話
2月21日(土)	いまは福島のこと、いつかはあなたの町のこと—— ふるさと福島を奪われ、若い母親となって 講師＝若松こはる（介護士）
2月28日(土)	時代閉塞のなかで生き、考える若者たち（第二弾）—— 『社会評論』177号・178号の若者特集記事を読んで 講師＝中西新太郎（元横浜国立大学教員）
3月7日(土)	3・8国際婦人デー集会
3月11日(水)	多国籍企業の下僕と化した安倍政権—— 「日本再興戦略」を読む 講師＝吉良 寛（横浜市従業員労働組合）
3月14日(土)	拉致問題で歪む日本の民主主義—— 日朝交渉再開と日本政府・マスコミの対応を検証する 講師＝高嶋伸欣（琉球大学名誉教授）
3月24日(火)	日本の短編小説を読む 葛西善蔵作『湖畔手記』（岩波文庫） 講師＝立野正裕（明治大学教授）
3月28日(土)	フランス・イタリア作品『かくも長き不在』（1960年 アンリ・コルビ監督・98分）上映と討論 解説＝岡野奈保美（文化活動家）
4月18日(土)	フランス・スウェーデン作品『戦争は終わった』（1965年 アラン・レネ監督・116分）上映と討論 解説＝立野正裕（明治大学教授）

《2014年度後期募集要項》

- 定員 本科生40名（10月20日(月)より募集）
- 全講座26回（各週1～2回程度）
- 本科生は、すべての講座を受講できます。その他、交流を深めつつ数講座を集中して学ぶ夏季合宿（前期）や、懇親会などの企画があります。
- ◎聴講生20名  
シリーズを問わず、自由に講座が選べる12枚綴りの聴講チケットがあります。
- 費用  
◎本科生 入学金…1万円（次期以降は不要）  
受講料…前期：3万円、後期：3万円  
・前期5月、後期11月の開講時までそれぞれ納入してください。
- ◎聴講生 聴講料回数券…15,000円  
・聴講料納入と引き換えに12枚綴りの聴講チケットをお渡しします。  
・1回の受講料は本科より割高ですが、一般受講より割安になります。  
・2014年度後期の聴講チケットは、2015年度前期にも使用できます。
- ◎一般 受講料…1,500円（各講座1回につき）  
・本科生・聴講生以外の一般参加は、受付で現金にていただけます。
- 申込方法  
・所定の申込用紙に必要事項を記入のうえ、入学金・受講料を添えて、直接事務局に持参、または現金書留にて郵送してください。郵便振替ご利用の際は、申込用紙を別途郵送または事務局にお持ちください。
- 注意事項  
・HOWSゼミナールについては、会計が異なります。  
・講師の急病等やむを得ない事情により、日程・テーマ・講師等が変更になる場合があります。